

2017秋・全国技術部会報告

開催日時&会場：2017年11月25～26日 志賀高原熊の湯スキー場

参加者：26名

全国：萩原技術教育局長、岡田技術部長兼事務局

全国技術部員：渡邊（北海道）、五十嵐（北海道）、高坂（青森）、畠山（岩手）、渡邊（福島）、
関根（埼玉）、横田（新潟）、出崎（東京）、福島（東京）、吉越（神奈川）、
佐藤（岐阜）、寺田（愛知）池田（滋賀）、森田（京都）、桶谷（奈良）、
明星（大阪）、辻本（和歌山）、西村（福岡）

中央研修会講師：野瀬（滋賀）、小川（東京）、斎藤（神奈川）、赤木（大阪）、和田（兵庫）

上級指導員研修：阿部（埼玉）

2016年春の部会で確認したとおり、「新教程カリキュラム（案）の検証」をテーマとして雪上検証を行いました。

1. 教程改訂のカリキュラム案を検証

スキー協会は、2019年2月に50周年を迎えます。現在、2018年秋の発刊を目指して教程改訂作業を行っています。

2016年に机上で3回、2017年は1回。2017年3月に雪上で1回、教程制作委員会を行ってきました。教程書の編集委員会は4名体制で10月末に1回実施しました。

教程の基本的な考え方は、「教程に関する会員・指導員向けアンケートの結果に基づき」

- ・現教程の基本的な考え方は良いという評価なので全面改訂はしない
- ・プルークを使った導入の要望が強いため、これを盛り込む

この2点を柱とした展開になっています。

■全体概要

春の部会で確認し、GWで撮影を行ってきた内容をベースに一部変更したカリキュラム案を雪上で実践しました。

新教程は、谷回りできちんとコントロールすることを重視しています。そのため、プルークの段階から、外押し開きから外脚荷重という技術でターンすることを組み入れました。

しっかり雪面を捉えたターン技術を習得してもらうため、外側への外スキーの押し出しから、外脚荷重、切り替え時も外脚（谷脚）荷重のまま斜滑降に入り次の開きだしに入る流れとしました。

外押し開きの技術は初歩の段階ではスキーを外側にしっかり押しずらしますが、この動作は発展的にスキーをたわませて滑る技術につながり、カービング技術になっても安定度の高い技術習得になります。安全なスキー技術習得という観点からも外押し開きから外脚荷重が有効と考えました。

切り替え時の斜滑降は前に出ることを一貫して重視します。

この理由は、内向傾のターンポジションに入れない会員が多い最大の原因は、切り替え時に重心を前に移動し切れていないためです。

■重心の位置によって種目を分けた

プルークの重心は左右のスキーの間ですが、パラレルは二本のスキーの内側へと変化します。

この中間の技術として内脚を軸にした技術がベーシックパラレルターンとしました。

そして、重心が両スキーの内側にある技術は洗練のパラレルターンとしました。

現教程ではベーシックパラレルターンは切り替え時に高い姿勢、洗練のパラレルターンは中間姿勢という分け方ですが、今回は重心の位置により線引きしました。

■パラレルターンの定義

切り替えが平行スタンスで切り替わる技術をパラレルターンとしました。
ターン時に平行スタンスではないプルークによるターンであっても、ターンとターンの繋ぎに平行スタンスとなる斜滑降を入れることで初歩のパラレルターンとしました。

そして、パラレルターンの切り替え方法、斜滑降、横滑り、山回り技術を早い段階から練習して、平行スタンスの滑り方に早くから馴染んでもらう方法をとりました。

■足裏切り替えについて

「ベーシックパラレルターンⅡ」から足裏切り替えを紹介しています。
外脚のとらえなど安全面からも大切な技術なので、新しい教程の中でも重要視していきます。

■内向傾ターンについて

現教程の種目に置かれている「内向傾ターン」。
パラレルターンへの導きの1つの手法なのに、この種目だけ技術として独り歩きしているように見受けられます。これが種目として無ければパラレルターンが出来ないというものでは無いので、展開図から外すことになっていますが、谷回りに入る際には必ず必要な動作です。

2. 新しい教程を広く多くの人に伝えていくために 部員に意見を出してもらいました

- ・メイトで宣伝するのが良いのでは？
- ・ある程度の技量を持った人が、スキー学校的な感じで講習会を開催し、HPで募集する
- ・中央研修会やブロックの研修会に積極的に参加する
- ・教程が変わったタイミングで2～3年、技術部長に来てもらったのがとても刺激になった
- ・北海道の中での研修会講師のための研修会をして講師として各地で講習していく
- ・社会的な媒体を使って宣伝していくことも大切ではないか？（スキーヤーという雑誌）
- ・研修会で技術を伝達できる人材をきちんと作っていく必要がある
- ・スキー協の人は、自分の中だけではなく、もっと外の世界に向けて出ていくべきではないか？
- ・他からの評価を知ることも大切ではないか？
自己研鑽につながるし、自分の身を投じていく必要がある
- ・デモの活躍の場をもっと広げていく必要があるのでは？
- ・スキー協のデモをブロックなどに呼んで活用するべきではないか？
- ・技術伝達をきちんとできるデモを講師として派遣
各地で講師を呼んで行事をすることが会員拡大につながる
- ・デモ選に全国技術部員は全員参加
自分自身が努力して第三者に評価してもらうことが成長につながる

■総論

全国としてその場を作っていくって欲しいという要望が部会内であった。
派遣されるデモ自身も、自分が所属する都道府県ではないところへ行って講習することは、とても良い試練になり、成長することになるのでお互い刺激し合って成長していける。
技術の伝達に向けて、全国と地方スキー協がお互い声を掛け合っていくことが大切。

3. 部会の運営について確認を行いました

事務局の負担軽減のため、部会への出欠確認は引き続きメールを使って実施することを確認。
一度連絡があった内容の変更は基本的にしないこと、部会案内に対しての返事が無い場合でも事務局から催促しないことを確認しました。

（報告：全国スキー協 技術部長 岡田章男）